

全国自問教育の会



EOSA Education of Self-Asking

発行日：2012（平成24）年8月1日 No.3

発行者：全国自問教育の会（会長：小島信由）

編集：自問教育の会事務局（斉藤 丸山 片岡）

事務局：長野県飯田市龍江 9205 飯田市立竜東中学校内 斉藤辰幸

連絡先：TEL 0265-27-3169 FAX 0265-27-4729

E-mail: pgjyk304@yahoo.co.jp

会長 あいさつ

今、学校とその設置者である教育委員会がそのあり方までを含め批判の矢面に立たされている『いじめ』の問題。これはどんな学校でも避けては通れない問題であり、大きく報道されればされるほど、必ず現場教員に対して行政的な圧力がかかる。そうすると、大多数の先生方にとって、子どもとコミュニケーションを取るための貴重で大事な時間が対策会議のために減らされていくことになりはしないかと危惧している。

さて、この『いじめ』の問題。原因として、人間の持つ心の弱さ、他者への思慮のなさ、心の未成熟、集団心理の問題等であり、それに対していろいろな側面からの教育があると思うが、我々が共々追求している「自問教育」は、まさに「我慢力(意志力)」、「主体性」、「他者への思慮深さ」等の『心の育ち』の実践力を付ける教育活動で、この「いじめ」の問題解決に直接に結びつく活動と信じている。

私が経験した拙例を簡単であるが、示したい。

- ・ 依頼心が強い山の子どもたち。他者の考えに盲従するのでなく自分なりの考えを持って問題(活動)に臨める子に。
- ・ 1年目は、他人に迷惑をかけないよう意志力(がまんとやる気)を付けるのを主眼に、全校で黙って清掃。
- ・ 1年半が過ぎる3学期の終わり頃、係主任と相談し、クラスで決まっている清掃場所ではなく、自分が今までよく使ったことのある感

謝できる場所で清掃する。

○ ルール

- ・ 発達段階に応じて、感謝の気持ちを表したい場所選びができるよう、担任が子どもに伝え、自分でその思いが叶う場所を考える。
- ・ 自分で決めた場所へ行き、自分なりのやり方で清掃。先にやっている人が大勢いたら、まだやってみたい所はないか考えて次の場所へ行く。

○ 結果

- ・ 自分なりの意志力が育ってきている子どもたち。そして、「多くの子どもたちが自分の考えた場所でほうきやぞうきんがけ、バケツ運び等の方法も考えながら熱心に行動できていた。」との担任からの報告があった。

この子どもたちの間には、「いじめ」は存在しないと思う。もしあっても、子どもたち同士、担任と子どもでその行為は共有され、すぐに無くなるのであろうと思った次第である。

今年度は、長野県を飛び出し、石川県は野々市中学校をお借りし、自問教育を学び合いたいと思う。この紙面をお借りして会場校にお礼を申し上げると共に、大勢の先生方にご参集いただき実り多い研究会になることをご期待申し上げ挨拶とさせていただきます。

会長 小島 信由

第 2 1 回 全国自問教育の会

会場：石川県野々市市立の野市中学校

平成24年11月2日(金)・3日(土)

《会場校校長のあいさつ》

自問の会 開催にあたり

暑い日々が続きますが、全国各地で自問教育に取り組まれているみなさま方におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

さて、このたび11月2日・3日と本校を会場にして「自問教育の会」を開催できますことに、関係各位のみなさま方に深く感謝申し上げます。

新任校長として光野中学校に赴任し、自問教育と出会ってから6年の歳月が過ぎ去ろうとしています。赴任した年に文科省指定の道徳教育の公開研究発表会があり、今まで取り組んできたことを生かし、さらなる道徳的実践力を育成するために何か良い手だてはないかと考えていたとき、恩師の室峰常弘氏から自問教育を紹介され「これだ!!」と思ってその年、長野県に3人の教師を派遣したことを鮮明に記憶しています。

それ以来、生徒の人的成長を促す手だてとして自問教育に取り組んできました。

このたび、発表会を開催する機会を与えてもらったことに深く感謝申し上げます。遠方ではございますが、本校にご来校いただき、各地で取り組まれている実践からたくさんの方の学び、今後の本校の発展に尽力してまいりたいと思っております。

みなさま方のご来校を心からお待ち申し上げます。

敬具

平成24年7月20日

石川県野々市市立野々市中学校
校長 橋口 有康

《大会の日程》

◇11月2日(金) いしかわ道徳教育推進事業「人と地域を生かした道徳教育講座」
自問教育の会

12:30	13:00	13:15	13:30	14:20	14:30	14:50	15:30	15:45	16:35	16:45
受付	自問清掃 参観	移動	道徳授業 公開	移動	開 会 行 事 ・ 移 動	授 業 整 理 会	休 憩	本 校 研 究 発 表	事 務 連 絡	情 報 交 換 会

◇11月3日(土) 自問教育の会

8:45	9:00	12:10	13:10	14:40	15:00
受付	実践交流会 I	昼 食	実践交流会 II	閉会行事	



《公開授業》

学年	題 材	授 業 者	整理会場
1年4組	自問ノートを 自作資料とした授業 (※詳細は未定)	盛田 和代 教諭	4 F
1年6組		奥野 智之 教諭	図書学習室
2年1組		前坂 逸子 教諭	3 F
2年5組		白井 順子 指導教諭	特活室
3年1組		大路 貴之 教諭	3 F
3年4組		吉田 滋 教諭	学習室3C①



野々市中学校自問清掃 「深まり」と「刺激」を与える取り組み

- (1) 『自問ノート』による振り返り … 自己の行為の振り返りの習慣化。
今年度は毎週金曜日に、清掃直後の10分間を充てている。全職員でノート指導にあたる。
- (2) 自問道徳授業の定期実施 … 自問ノートを活用した、「吸い上げ討論式」道徳授業による活性化。
全学年全クラス、学期に最低1回を目安に道徳の授業内で担任が実施。
- (3) 『ののいち自問通信』の発行 … 生徒の意識向上と、家庭への通知。
自問清掃の良さを、活字で伝えるメディア。風刺的な内容をマンガや、話題の本との関連性を導き出すなど、自問自答のきっかけをつくることを目的としている。
- (4) 自問集会の開催 … 個人レベルの意識向上と、集団力の発揮
講話や他校の映像を見ながら、自問清掃の良さを全校一斉に共通理解する場面である。昨年度は教師主導2回、美化委員主導2回の計4回を開催し、少しずつ定着してきている。終了後は体育館での一斉黙想を実施し、クラスごとの退場指示をせずに心が落ち着いた者から自発的に掃除場所へ向かう。
- (5) 自問放送 … 良さを“聴く”，意識する時間
毎月末に、身支度心支度の8分間の後半3分間を活用して、自問推進委メンバーの所属学年による自問ノートの好例などを全校放送で朗読し、聴くことで生徒が「良さを深める」＝「自問する」時間を月に1回ですが設定している。
- (6) 自問大掃除の開催 … 拡大と応用の実践
昨年2学期から、前後半に分け、前半の12分間は一カ所に集中し、後半の13分間はいつもの自問清掃を行う形とし、前日の自問清掃の時間内に、明日の前半12分間にどこを集中的にやるのかを“見つけ”ながら、自問清掃を行い、自問ノートの代わりに配布される大掃除ワークシートにその内容を記入して担任へ提出する、というスタイルが確立した。

授業者の声

授業者の先生方に、自問清掃に取り組んでいる中での思いを書いていただきました。

1 学年担当：奥野 智之

今年度、1年生を担当し、私の想像を超える1人の生徒に出会いました。その生徒は、自問清掃を始めて1週間目から、自分の心を深くみつめ、自問を通して性格を直したいと考え、毎日実践しています。1学期の途中、私のクラスでは全体的に自問に慣れて、中だるみのような時期もありましたが、この生徒の自問ノートから、それぞれの自問への取り組みを見つめなおすことができ、自問清掃の質が向上した生徒が多くみられました。私自身、どのようにしていけば、よりよい自問へとつながるのだろうか？と悩むことも多いのですが、生徒とともに自分の心を磨き、成長していきたいと思えます。

2 学年担当：前坂 逸子

クラスに自問清掃に取り組めない生徒がいる。その生徒は、静かにしていること自体が苦手で、黙って、じっと座っていることもできない。そんな落ち着かない中で周囲の生徒は何か我慢清掃や見つけ

清掃を試みている。それでも時には共にふざけてしまいたいという誘惑に悩むことも、負けてしまうこともあるようだ。しかしそれが自分の成長につながることはわかっているとノートの中で述べている。大多数の生徒が「一人でもがんばる」ことの難しさと向き合いながら自問清掃に取り組んでいる。

3 学年担当：大路 貴之

ある日の6限後、私にとって初めての「自問清掃」が始まりました。特にお喋りするわけでもなく各自の掃除場所へ移動していく生徒達…。私にとっては大きな発想の転換を迫られる覚悟があったつもりでしたが、いざ始まってみると不思議な緊張感があります。そんな私を尻目に黙々と段取りよく清掃を行う生徒達…。何だか焦っているのは私だけ…。それを都合良く捉えサボり傾向が見える生徒もいましたが、ある面で「生徒の本性」が見える活動であると感じ、その中に生徒の成長を促すパワーを感じた瞬間でもありました。

コラム 自問への窓

「自問清掃」の人間形成的意義を語ること



信州大学教育学部教育科学 土井 進 教授

1. フレッシュマンに語る

去る5月29日（火）に松本キャンパスで学んでいる「現代教育コース」の新入生33名に、「信州教育」の先覚者たちと題して講義を行った。私が取り上げた人物は、内村鑑三、上田薫、竹内隆夫、林芋村、木村素衛、小林一茶、川井清一郎の7名であった。講義を終えてこの7名の中から、最も関心のある人物を一人選んで調べる学習を課題とした。この課題に最も多く選ばれた人物は内村鑑三11名で、2番目が竹内隆夫7名であった。竹内隆夫が多く選ばれた背景には、33名中長野県出身者が16名いたことが考えられる。

竹内の業績を調べた16名のレポートに共通していたことは、ただ黙々と清掃していることをよいとすることでなく、清掃活動に込められている人間形成的意義についても小中学生時代にもっと教えてもらいたかったという要望であった。自問清掃の創始者が竹内隆夫先生であったということも初めて知ったという学生が多かった。

私は、これらの学生の声に接して、「自問清掃」の有する哲学性、精神性を我々はもっと自信をもって小中学生に語っていくべきではないかと思った。

2. 竹内隆夫の「自問清掃」にみる

「信州教育」の美質－「正直」「愿慤」－

筆者は平成4年9月に竹内隆夫先生から直々に「自問清掃」の5段階の指導法を教わる恩恵に浴した。「意志力」「情操」「創造力」「感謝」「正直」の5段階全体についての個人教授

を受けた筆者は、感動に打ち震えながら次のようなお礼の手紙を書いた。

過日は「自問清掃」の5段階全てについて教えて下さり、誠にありがとうございました。教聖ペスタロッチの教育者魂に源を発する「自問清掃」は、21世紀を担う子どもたちを育てる教育者を目指す学生が身につけなければならない必須の教育方法であると思います。竹内先生の五段階の指導法の究極の目標となっている「正直」について、私が師事した周禮研究会の高田豊壽先生は、昭和58年6月25日に次のように教えてくださいました。

「私には60年前、関東大震災のときの思い出がある。少年時代、私の家にはたくさんの方が逃れてきた。30人くらいの親戚の人々が集まり、そのほかの人々も合わせて、100人ぐらいが庭先にそろったことがあった。その時、高田先生のおばあさんのおじいさんが、「ここのうちの子は、よく躰が行き届いているなあ」とおっしゃった言葉をいまだに忘れず覚えている。「厳格」なしつけをやっても、いいものは出てこない。「愿慤（げんかく）」なしつけをしなければいけない。「愿慤」とは、真っ正直で偽るところのない教育(Honest Upright)ということである。英国人はこのような教育を好む。根っからの教育をやることが一番良い」と。

竹内隆夫先生がその生涯をかけて編み出された清掃活動による人間形成は、まさしく「愿慤」(Honest Upright)な教育であったことを筆者は自得した。

「自問活動」の創始者 竹内隆夫先生を偲ぶ

昨年の2月。竹内隆夫先生が惜しまれつつこの世を去りました。竹内先生の偉大な業績を知る先生方も高齢になってきています。現在自問清掃を現場で実践している先生は、第3世代、第4世代が中心です。この紙面をお借りして、竹内先生から直接ご指導を受けた鎌倉正之先生より、竹内先生の偉大な功績を紹介していただこうと考えました。長野県民新聞にて、『信州教育を支えた人々』と題して、竹内隆夫先生が紹介されました。筆者は本会前会長の鎌倉正之先生です。先生より許可を得て、長野県民新聞より転載させていただきます。



竹内隆夫先生

竹内隆夫評伝 -上-

鎌倉 正之

はじめに

今、私は大いなる怖れを感じてペンをとっている。あのよう大きな人の業績を私ごとき者が表現できるのか？あるいは、もっとふさわしい人が他にいないか。ともあれ、できる限り資料にあたって見たが、なにぶんにも時間の経過という深淵が横たわっており、記憶の定かならぬこと多々ある。従って日づけの間違いや前後関係のあやふやなところがある。それは違うぞと指摘されそうで恐ろしい。更に、同じ事実であっても私の感じ方と他の人の感じ方は違っていて、そんなことはないぞと言われたらどうしよう。それやこれやで筆が止まってしまうのである。しかし私は信州教育に大きな足跡を残した竹内隆夫という人物の業績を彼の死と共に黄泉の国に葬ることはできないとも考えている。そこでこう心を決めて書くことにしよう。

これから書くことはあくまで私の心に映った竹内隆夫伝である。だから、そこかしこに無遠慮に私という人間が登場するがお許しを乞う。後は、彼の伝記を書くにふさわしい人々にご批評願おう。又、世の批判は甘んじて受けよう。とにかく書いてみることにする。どうせやるなら楽しんで書こう。竹内先生、お叱りはそちらへ行ってから受けます。

不死鳥

脳梗塞で倒れたのは平成9年3月だったと思う。半身不随となり、言語がやられてしまい、車いすの生活となった。

自宅へ見舞ったときのことである。こちらのいうことは100%分かるようだ。「そうかい、そうかい」と嬉しそうにうなずく。緊急入院して、正気を取り戻すとすぐに自由のきく左手で絵筆をとり、絵を描き始めたという。おびただしい数のスケッチを奥様が見せてくださった。円形の線の連続。生への執着、それは竹内先生

にとっては毎日毎日円を描くことだった。円が次第に長円となり、楕円に変わっていく。やがて顔らしいものが現れてくる。長い月日の末、それは女の顔とはっきり分かるほどになってきている。まるで霧の中から美女が現出したように見えた。病状の回復を絵が物語っていた。「先生は不死鳥だ。必ず戻ってきてくれる。」と思った。いかなる時もあきらめない、そして生ある限り表現する。竹内先生のすごさに身震いした。それは、元気なときの教え以上に私の心を揺さぶり、生きることのすばらしさに気づかせ、勇気を与えてくれたのだった。

奥様が「本やら埴輪やら絵やらがいっぱい困っています。」という。「そうだ、ねえお父さん、鎌倉先生に持って行ってもらっていいですか？」と聞くと、竹内先生はこっくりと頷いた。書庫に行くと、確かに美術全集やら哲学書、先生が作った埴輪などでいっぱいだった。「どれでも気に入ったものを一つ選んでください。」というので埴輪「琴を弾く人」を所望して、部屋へ運ぶ。「これをあげてもいいですか？」と聞くと（ほう、君はそれが気に入ったか？というような顔をして）にこにこして頷く。「本も持って行ってもらいましょうよ」といって再び書庫へ行く。（そうだ、美術全集なら、竹内文庫として学校の図書館に寄付して、多くの生徒に見てもらおう）と思い、そっくり頂くことにした。そのことを話すと嬉しそうに頷いていた。紙芝居のコピー、未使用の画仙紙も、先生はそのたびに（いいよ）というように頷いた。本当は病室に懸けてあった肉質の絵がほしかったので、「あれも・・・」というと怖い顔をして今度は頷かない。先生はちゃんと分かっているのだ。悪いことをやってしまったと浅ましい自分を恥じたことだった。

出合い

何とか子どもをよくしたい、よいクラスにしたいと焦り、苦心していた20代後半の頃のことである。小学校3年生の担任として、良いと

思う試みを次々と試した。一番効果が出たのは、石原慎太郎の「スパルタ教育のすすめ」だった。1年もすると、子どもは教師の目の動きで動くようになった。楽にはなったが怖くなった。子どもは教師のロボットではない。子ども主体の教育にならなければ意味がないという考えに傾いていった。宮坂哲文の生活指導を実践しているベテランのY先生の教室へ参観に行った。子どもたちは生き生きと活発に発言し、授業を主体的に進めているように見えた。そんな折り、竹内隆夫の「精神性を高める教育」に出会った。掃除で人間が変わる？馬鹿な・・・学級づくりに苦心惨憺していた私は、竹内の方法が奇策に思えた。とんでもない教員だ！こんなことが起こるはずはない！事実を歪めてでっち上げ世間を欺いているに違いない。私はまだ会ったことのない竹内という人を心から憎んだ。しかし、それは澱のように心に溜まり、時々顔をのぞかせる気になる存在となっていった。

奇跡

竹内先生に初めて出会ったのは、それから3年後の転任先の中学校だった。

その学校では、新学期に竹内先生を招聘して学習指導のあり方について指導を受けていた。来校当日、私は胃痛に悩まされた。庭掃除の監督をしていたとき、その人は忽然と現れた。恰幅のいい上品な人物だった。顔には笑みをたたえ、人を一瞬にして包み込む雰囲気を持っていた。(この人なら、できたかもしれない・・・)と直感的に思った。体の力がスーと抜けて、胃痛が治まった。

まず示範授業から始まった。中学2年生の教室で文学教材の音読の授業だった。音読が深まれば読解が深まるという考えに基づいた授業である。教材名は忘れて示まったが、馬が遠くから駆けてきて作者の前を通り過ぎていく場面があった。「パッカ、パッカ、パッカ」竹内先生が一つの文節を読む。次に生徒が一斉に復唱する。(声が小さい、お経読みで気持ちがこもってい

ない)続いて、右列つの生徒数人に順次立って読ませる。そこのパッカ、パッカ、パッカは遠くからこちらに近づいてくるね。そうするとパッカ、パッカ、パッカとなるでしょうね」数人に指名して復唱させる。(確かに近づいてくる感じがする)「ハイ 全員で」「パッカ、パッカ、パッカ」そして、2番目の列の先頭の生徒に指名して次の文節を読ませる。(感じが出ていない)「どうですか？今度は自分の前を通り過ぎて、遠ざかる感じが出ていますか？次の人やってみて」と順に当てていく。「パッカ、パッカ、パッカ」(少し感じが出てきた)「全員で」「パッカ、パッカ、パッカ」このようにして生徒は授業に引き込まれていく。竹内方式では、はじめに教師が模範を示し、スモールステップでだんだん高度なところへ導いていく。そして、生徒自身に考えさせるように導く。意見を言い合うことはせず、ひたすら読みに浸らせる。全員で。一列ごとで。一人で。読解の深まりが音読にはっきり現れてくる。教師は一時間の中で全員が一回は一人で読む場を作っている。挙手させないで、前から順々に当てていく。あと2人目の女生徒は、学校で声を出したことがない寡黙児だ。二年間、誰も彼女の声を聞いたことがない。そこまで行けば万事休すだ。読めなかったら次へとばすのだろうか？「次の人読んでください」彼女は起立する。本を持つ。しばし沈黙。教室に冷たい風が流れる。さて、どうするか・・・竹内先生は傍に行って何やら囁いた。彼女は一生懸命声を出そうとする。緊張感が教室を覆う。竹内先生はニコニコして待つ。しばらくして、彼女はつかえながら声を発した。透き通ったかわいらしい声だ。友達から拍手がわき起こる。すかさず先生が彼女を優しく招いた。そして、全員の前に立たせて、何か彼女に囁いた。何と彼女は堂々とした透き通った声で何文節かを読み通したのだった。私は奇跡が起きたと感じた。竹内先生の何が彼女の心を開いたのか。今も分からない謎である。

S小学校でのことである。2期目の若いY先生が指導上の悩みを抱えていた。彼は誠実で責任感の強い教師だった。一生懸命努力すればするほど空回りして、児童に受け入れられない。ベテランの学年主任のクラスとはどうしても差が出てしまう。保護者も不満げであった。私もよく相談に乗ったり慰めたりしたが、彼の悩みは深まるばかり、ついには「自殺したい」とまで言うようになった。そんな時、竹内先生が学習指導全体講師としてやってきた。1日目は午後来校し半日指導して2日目は終日指導に当たる。1日目の夜、私はあまり気が進まなかったY先生を連れて宿舎にお邪魔した。竹内先生なら何とかしてくれそうな気がしたからだ。Y先生はうまくいかないことをぼつりぼつりと話し始めた。竹内先生はニコニコして「そうかね。そうかね」と聞いている。話の先を促すこともなく、助言するでもなく、ただ淡々と聞いているように見えた。やがてY先生は饒舌になり、感情的になって畳の上にひっくり返って「もう死にたい。死んでやる」と叫んだ。竹内先生は驚くこともなく、ニコニコして「そうかね」と頷くだけ。私はずっと傍に座っていたが竹内先生が何か特別なことをしたとか、言ったとかの記憶は全くない。だが、不思議なことが起こった。Y先生は泣いていたと思う。思う存分自分の感情を表出した後、正座をして非礼を詫びた。翌日からY先生はがらっと変わった。明るく快活に子供と接するようになり、クラスは見違えるように良くなった。そして、満足感を持って子供を卒業させ、新任地へ転任していった。竹内先生は取り立てて何もしなかった！何がY先生を変えたのか、今考えても分からない。奇跡が起こったとしか言いようがないのである。

(続く)

竹内隆夫評伝 -下-

次号(3月発行予定)に掲載予定です。

《竹内隆夫先生の略歴》

昭和11年長野県師範学校卒、城山小、信大長野附属中、上田北小学校教諭、篠ノ井西中学校長、野岸小学校長、中野市高社中学校長を最後に51年退職。

この間県教委美術科指導主事、義務教育課指導主事、教学指導課指導係長を務め、退職後は、社会教育相談事業企画委員、県社会福祉専門講師、日本美術教育学会本部委員。

著書

- ※「精神性を高める教育」-学校作りの記録-
- ※「自らに問うということ」-中学生への提言-
- ※「教育愛語」
- ※続「教育愛語」
- ※「うちの子にかぎって」
- ※「自問活動のすすめ」

-自らの生き方を問う子どもたち-



自問する中学生…

全国の実践者たちの声

全国に広がりを見せている自問清掃。実践者の先生方に声を寄せていただきました。ご意見ご感想がありましたら、事務局までお気軽にメールなどでご連絡ください。

北海道 旭川市立愛宕東小学校

宇野 弘恵

持ち上がりの2年生。自問清掃を始めた頃は、無意識に声が出る、話しかける、ちょっかいを出す、遊び出す...の毎日。自分のインストラクションが悪いのだ、指導力がないのだと反省しつつも、無性に腹が立ちました。この子たちには無理なんだとも思いました。

「信じて待つ」という信条はどこへやら。私は、表情や態度で怒りを表しました。

黙々と床を拭きながら、ふと、気付きました。腹が立つのは、自分の思い通りに行動しない子どもへの怒りだと。私は、子どもを力でねじ伏せ、コントロールしようとしていたのだと。自問清掃と出会った7年前に、そんな私から卒業したはずなのに...。ああいけない、と思い直しひたすら掃除に専念。

すると、不思議です。子どもたちが変わってきました。話し声が減りました。遊ぶ子がいなくなりました。床を一生懸命磨く子、大変なところを手伝う子。振り返りノートには「この掃除に慣れてきました」「心を合わせる事がわかってきました」「頑張っている自分をいいなと思います」そんな記述が見られるようになりました。

今のクラスは、始めてまだ半年。進級までの8か月でどう変容するのかが楽しみです。

兵庫県 神戸市立甲緑小学校

深沢 英雄

自問清掃をはじめて知ったのは、6年前のことです。初任研担当になった年でした。週に1度、指導日に行くA校に私の知り合いが勤めて

いました。彼が、平田先生の本を読み、自問清掃を学校で実践していました。学校全体で取り組んで1年がたっていました。それから2年後、転勤しました。転勤したB校に、A校で自問清掃を実践していた先生が2人いました。クラスや学年で実践していました。私も、平田先生の本を読みながら、実践をはじめました。学校に少しずつ広がりました。平田先生に会いたいと、長野の研究会に行き、神戸で講演してもらうことを了承してもらいました。2年前に神戸で講演会を開き、同じ学年の先生2人も参加してくれました。

今年転勤しました。現学校では「サイレント清掃」という名前の無言清掃を実施していました。神戸の学校ホームページで探すと、「自問清掃もどき」の清掃をやっている学校が結構あります。他の学校でも「サイレント清掃」をしていました。C校では、「清掃活動について。無言清掃、理想の姿は自問清掃へ。『自分はこれでもいいのかと自分に問い直しながら、自分で考え、自ら進んで行う』清掃活動ができるようにしたい」と書いてあります。調べてみるともっと実践している学校があると思います。しかし、どこまで平田先生の考えを理解し清掃しているかは、疑問が残ります。形から入って、心にいくといくことでしょうか。

長野県 北相木村立立北相木小学校

山浦 浩治

北相木小学校で「自問清掃」に取り組み始めて、今年で4年目になる。昨年度からは、自問清掃を「生きる力を高めるための素地力をつける場」と考え、本校の教育活動の土台としてランドデザインに位置づけてきた。とはいえ、

北相木小学校の自問清掃がしっかりと確立しているわけではなく、今年も今までと同様に、みんなで悩み、考え合いながら少しずつ歩を進めている。

本校では自問清掃の取り組みの一つとして、月に一度、全校児童が集まって「自問集会」を行っている。全校児童47名という小規模校だからこそできる集会だろう。職員が輪番で司会者となり、1年生から6年生までの子どもたちが、学年の枠を超えて自分たちの自問清掃について語り合っている。時には、「清掃分担場所をなくして、自分のやりたい場所を掃除するようにはどうか。」など、清掃の取り組み方についても子どもから提案される。本校の自問清掃にとって、とても大切な時間となっている。

職員が研修を積むのはもちろんだが、自問集会を通して子どもたちとともに考え、北相木小学校ならではの自問清掃を、今後も作り出していきたいと思う。

愛知県 尾張旭市立西中学校

川上 淳

自問清掃との出会い

今から3年ほど前、勤務していた中学校は、全体的に指導が生徒の心に響かず、楽な方向に流されていく傾向にありました。特に、掃除の時間では、真剣に取り組むことができなかつたり、掃除場所から離れて遊んでいたりする生徒が多くいたのです。当時、3年担任だった私は、目的意識を持たせようと掃除についての授業などを行っていましたが、思うような効果が上がりませんでした。

そのような時、進路関係の話で終わるはずの2学期懇談会で、子どもから話を聞いたある保護者が、よかったらと手渡してくださった数冊の中の一冊が、『子どもが輝く 魔法の掃除』だったのです。早速読んでみたのですが、その実践のすばらしさに衝撃を受けました。と同時に、

本当にこのようなことが現実であり得るのだろうか、正直思いました。

しかし、今の状況をなんとか変えたいと考えていた私は、さらにインターネットで調べ、躊躇することなく事務局に連絡を取りました。そのメールを受け取った相手が、なんと著者である平田治先生だったのです。まさに運命的な出会いとはこのことだと思いました。この出会いをきっかけに、石川県の光野中学校を見学させていただいたり、平田先生に学校に来ていただいたりして、次年度の9月から一学年だけの自問清掃を始めました。

実際に始めてみると、いろいろなことがわかってきました。清掃や係・当番活動など、成績とは直接関係がないので、“本当”の自分がでてきます。その中で、「ほめない・叱らない・比べない」ことにより、生徒を成長させていくことは簡単なことではありません。しかし、教師が想いを強く持ち、タイミングよく支援していくことで、周りに流されることなく今何をすべきか考えて行動できる“本物”が生まれ、確実に増えていくことを実感しました。

ただ、その後、異動となり、実質半年間しか取り組んでいませんので、自問清掃の実践をしたと胸を張って言えません。しかし、これだけははっきり言えるのは、自分自身の教師としての考え方（授業の展開や学級経営など）が大きく変わったことです。現在、自問清掃は行っていませんが、自問教育の考え方で生徒に接することができています。自問清掃、平田先生との出会いに感謝し、これからも生徒とともに自分自身も成長していきたいと思っています。

福岡県 八女市立忠見小学校

松藤 秀子

自問清掃と出あって

自問清掃と出あったのは、三年前のことです。宮崎市の中学校を訪問したとき、生徒たちの姿

に驚かされました。黙って掃除をしているだけではありません。並んでいないトイレのスリッパに気付いた男子生徒がさっとスリッパを並べたり、五時間目のチャイムと同時に自分たちで学習を始めたりしていたのです。その姿に感動し、自問清掃に取り組んでみたいと強く思いました。

忠見小学校で自問清掃に取り組んで、二年になります。始めるにあたり、最も難しかったことは、教職員の意識を変えることでした。掃除の時間も生徒指導に追われたり宿題のチェックをしていたりして、子どもと一緒に掃除をすることができないことも多々あります。そんな職員と初めに確認し合ったことは、子どもと一緒に掃除をすること、指示や注意をしないで掃除をすることでした。今では、子どもたちに少しずつ変容が見られるようになり、職員の意識も徐々に変わってきました。先日、学校の踊り場

の角に小さな草花が飾られていました。誰かなと思っていたら、二年生の子どもがみんなに楽しんでもらいたい、学校を美しくしたいという気持ちで、家から瓶を持ってきて飾ってくれたそうです。

現在は、自問ノートを活用し、自問集会を行ったり、特別活動や道徳の時間と関連化を図った授業を行ったりしています。忠見小の自問清掃は、まだまだ第一段階ですが、「子どもを信じ待つ」この言葉を合言葉に、私たち教職員も子どもとともに成長していきたいものです。



《編集後記》

全国各地で実践・研究を深めていらっしゃる13名の先生方に寄稿いただき、全国自問教育の会会報第3号を無事に発行することができました。多くの先生方のお力添えで、充実した紙面になりました。是非、お読みください。

今回は、今年の全校自問教育の会会場校、石川県野々市市立野々市中学校の先生方の全面的な協力を得て、2ページにわたって特集を組むことができました。石川の地で自問教育が根つき発展してきている様子が伝わってくる内容となりました。11月2・3日の大会も益々楽しみになってきているところです。

年2回の発行も定着し始めてきました。次回第4号は3月の末を予定しています。自問教育を実践されている先生方の積極的な投稿を今後もお待ちしております。

最後に、このような素晴らしい原稿が集まる会報の編集に微力ながら関わらせていただいたことに感謝申し上げます。日々、届く原稿から先生方の情熱と真心を頂戴しました。協力いただいた先生方に改めまして感謝申し上げます。そして、先生方の実践がより豊かに発展しますことお祈り申し上げます。
(文責：片岡)

ご案内

『子どもが輝く魔法の掃除』の著者、平田治先生がブログを公開しています。

<http://blog.livedoor.jp/hirata303-jimonnote/>

会報と合わせて、ご覧ください。